

## だいしんさい 大震災をけいけんして

「行ってきます。」

いつもと同じ朝でした。

わたしは、おばあちゃんに元気に声をかけ学校に行きました。いつもと同じように勉強して、休み時間には、いつもと同じようにみんなでドッジボールをして楽しみました。

そして帰りの会。

「今日も楽しかったなあ。」

と、みんなと話しながら、あとは、帰りのあいさつを待つばかりでした。すると、とつぜんゴォーと、大きな音がしてきます。地のそこから聞こえてくるようなその音はだんだん大きくなり、ゴォーがガタガタに変わっていきました。

何が何だか分からないうちに、先生の声や、友だちのさけび声が聞こえてきました。

「つくえの下にもぐりなさい。」

「きゃあ」

わたしは、声が出ませんでした。ただ、お母さんやおばあちゃんのことを思うとなみだが出て止まりませんでした。

ゆれはおさまらず、ますます大きくなります。

「つくえの足をおさえなさい。」

みんなの近くを必死に歩いていた先生の声が聞こえました。しかし、手に力をこめても、つくえの足は左右にずれて、どうすることもできませんでした。

つくえの中のお道具箱も本だなの本も何もかもが、ゆかにばたばたと落ちてきました。電気もぱっと消えてうす暗くなりました。それでもゆれは続きます。みんなの悲鳴や泣き声も聞こえてきて、こわくてこわくて、気が付くとつくえの足を力いっぱいぎっていました。

「荷物を持って校庭に出なさい。」

ろう下から先生の声が聞こえてやっとゆれがおさまったことに気がきました。

(作文宮城 60号 特別編「あの日の子どもたち」より)

